施工者に幸あれ 第85回

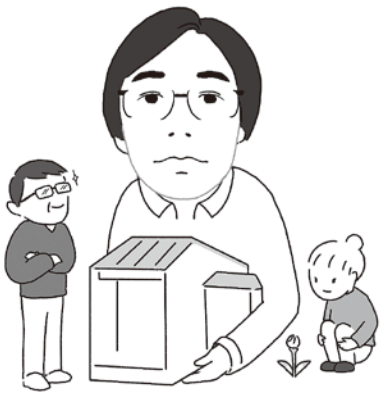
闘志は秘めるのが流儀
構造家・桐野康則

朝倉幸子◉TH-1
illustration:Taco

構造家・桐野康則さんは元来建築に対して，格別に興味をもって大学進学の目標にしていたわけではなかったという。東京大学では3年生で進路を振りわけるが，軽い気持ちで選んだのが「建築」だったとか。そう聞いてもまだ納得しかねた覇志堂は「では，何故構造に?」と重ねて聞く。「パルテノンの絵を見て，こんなのもいいなと思って…」と答える桐野さん。こちらは，IQの違いなのかと意図するところを憶測するしかない。「構造の中では，理論ベースがしっかりしていて鉄骨が面白そうだった」と，3年生のゼミから大学院まで鉄骨構造で高名な秋山宏先生のところへ行った。二つの建物がそれぞれに耐震性に問題がなければ，二つ合わせても大丈夫といったごく普通なことが研究課題だったという。冴えた頭脳を隠して，物腰はあくまで普通以上に穏やかな方なのです。

■SDGからKAP

「渡辺邦夫先生の一番話が面白かった」のでSDGに。同期の腰原幹雄さん（東京大学生産技術研究所教授，本コラム49回に登場）と木村俊彦先生に会いに行ったが，先生はその年はすでに採用したのでそれ以上は取らない方針だと断られた。木村先生から紹介された構造家のなかで惹かれた渡辺邦夫さん（本コラム78回に登場）の話が抜群に面白かったというのです。腰原さんも同じ気持ちでSDGに同期入社する。桐野さんにとっては，渡辺先生の言葉や教えは今のすべての糧となっているという。「一言でいえば大きい人。今も言葉の一つひとつと，なんとも言えない圧力が残っている」そうで少し苦笑いした。構造だけでよい建築になるわけではない，意匠設計者と喧嘩してでも通すところは通せ，何が大事なのかを考えることだと，師匠はいった。



2010年からは，構造家の岡村仁さん（本コラム50回に登場）と共同代表としてKAPを立ち上げて，今は3人の取締役で11人を率いる。岡村さんとはSDGからの付き合いで，お互いの考え方を理解しているので意思の疎通も間違いない。静岡県草薙総合運動場体育館（このはなアリーナ）では2016年第11回日本構造デザイン賞受賞した。ユニットとしては初めての連名受賞となる。建築家・内藤廣さんの木に対する思いを構造の大胆な発想で大空間を成立させた，と評価を受けた。この内覧会では渡辺邦夫先生から一言をもらったという。免震構造と柱の配置の関係のところだったが，一番苦しんだところを見抜いた鋭い指摘だったという。「今ならば免震装置の改良も日進月歩であるし，自分の技量も上がったと思うので超えられる箇所」と言う以外，言い訳は口にしないのだが。SDG時代にはテレビ朝日本社（設計/槇総合計画）を最後に担当し，独立後金沢エムビルでは1時間耐火の木造に挑戦した。

KAPとして「星のや軽井沢人道橋」（2006年）や，土木学会デザイン賞を受賞したハレニレテラス（2009年，設計/東環境・建築研究所，オンサイト），「星のや富士」（2015年）など，星野リゾートが事業主の今の商業性を牽引する建築を積んできている。

■これからの変貌

設計の着想がフォルムからでもシステムからでも，それが一致したときが完成だという。一方で，解けていてもしっくり来ない感じが残るときがあるそうだ。その解決方法は，「模型で見るのが一番早い」と真っ当な言葉が返ってくるが，「風呂に入っているときにふと浮かんだりもする」とも。オフィスで皆と模型づくりをしていた妻はSDG時代の同僚。サポートする体制も桐野さんには揃っている。まだ公にできない進行中のプロジェクトの完成を待とう。天賦の才を秘める構造家がどんな花を咲かせるか。師匠の渡邉邦夫と同じ構造家魂が，桐野康則には確かに生きていると，覇志堂は密かに期待するのです。